

茶道と戦争

—ある茶道家の体験談から—

濱田さやか¹ 藤野果南² 大塩皇龍³

Tea Ceremony and War
- Experiences of a Tea Master -
Sayaka Hamada¹, Kana Fujino², Koryu Oshio³

Japanese tea ceremony was established by Sen Rikyu, whose manners have been inherited from the 16th century over hundreds of years. We report about an interview of a master of one representative school of Japanese tea ceremony, *Urasenke*. In particular, the interview questions focused on the situation of tea ceremony in Japan during and after the World War II.

キーワード：茶道、裏千家、第二次世界大戦、太平洋戦争

Keywords : Tea ceremony, Urasenke, World War II, Pacific War

1. はじめに

現在、茶道には様々な流派があり、特に千利休が完成したとされる茶道の様式は、表千家、裏千家、武者小路千家において脈々と受け継がれたもので、四百数十年が経つ。‘茶’そのものが日本にもたらされたのは、奈良・平安時代に中国からとされる^{(1),(2)}。

ここでは、茶道が歴史的変化のある中で、昭和時代のとりわけ悲惨な第二次世界大戦という激動を経ても受け継がれていることに着目し、裏千家を中心に調査を行い、その時代を知る茶道家にインタビューを行う。この戦争を体験され、戦後の復興もご存知の茶道家から、その体験を通して、茶道を感じ取っていく。

2. 背景

戦国時代、千利休が考えた茶室は、頭を下げないと入れない入口（＝にじり口）があり、武士であろうと刀を刀掛けにかけて丸腰で入るようなものだった⁽³⁾。千利休

没後に、茶道の様式は少し形式を変えながら代々受け継がれていく。身分の高い者中心に、江戸時代には教養として男女を問わず茶道があった様子である。明治時代には、日本にいる外国人が増え、椅子と机でお茶をもてなす立礼式（りゅうれいしき）が、1872年に初めて行われた。その後、明治・大正時代から昭和時代にかけて大衆に広がっていく。1940年には、大徳寺で千利休350年忌の法要と茶会が行われた。同年、裏千家の全国組織「淡交会」が発足、その発足会には中国の奉天・大連や台湾からも代表が参加している⁽²⁾。

第二次世界大戦(太平洋戦争)の末期に、大学生であった第十五代裏千家家元の千玄室氏は、それまでの文系学生徴兵猶予が停止され、特攻隊に入隊することとなる。携帯の茶箱をもっていき、訓練の合間に飛行服のまま配給のお菓子とともに茶会をしていた。その後、転属となり終戦、千玄室氏の父のもとへ、米兵達がお茶を飲ませてくれと押しかけてきていたという^{(3),(4)}。命がけで飛び立つ可能性があった特攻隊にしながらの茶会がどのようなものであったか、想像はたやすくない。千玄室氏は、戦後、平和への願いを込め「一碗から平和を」をキャッチフレーズに、茶道の和の精神を伝えて行こうと60カ国以上の外国を訪れている。また、国内においても様々な地域で献茶をされている^{(5),(6),(7)}。

¹ 共通教育科
〒866-8501 熊本県八代市平山新町 2627
Faculty of Liberal Studies
2627 Hirayama-Shinmachi, Yatsushiro-shi, Kumamoto, Japan
866-8501

² 生物化学システム工学科
Dept. of Biological and Chemical Systems Engineering

³ 建築社会デザイン工学科
Dept. of Architecture and Civil Engineering

3. 茶道家へのインタビュー

八代市在住の裏千家教授・原田宗柳氏が旧制の小学校五年生のときに終戦となる。その頃の様子やその後についてなどをインタビューし、その話をまとめていく。インタビューは2時間以上に及んだ。また、原田氏の茶室も拝見させて頂いた。

3.1 大戦時の様子

第二次世界大戦中の日本は経済的に、安全性においても不安定であり、茶道どころではなかった、戦時中の生活は大変厳しく、辛かったのだという。食べ物は配給制で唐芋やそば粉を家族人数分の決められた量をもらっていた。配給は、海外からの輸入は停止しており、兵隊優先であったため、とても少なく、そば粉は、水を入れて練って増やして食べていた。その戦時中の食糧難の記憶からか、今でもそばは苦手と語られた。食料が十分でない中、栄養失調で多くの小さい子供達が亡くなっていったという。母乳の代わりにわずかな砂糖を水に溶かして、茹でてできたものを飲ませていたようだ。実際に、原田氏の末の弟が栄養失調で亡くなられたことを聞き、今では考えられない日常が存在していたことを思い知らされた。兵隊達は、ヒガンバナの一部を乾燥させ粉にし、団子にして食べていたという。終戦直前、学校は分散教育で、上の学年の者が下の者達によみかきを教えるなどし、教科書も学年違いの家へ相談に行き、おさがりを使っていた。衣類も乏しく、ありだけの糸等を集めて、作り直したり、もらった毛布をコートへ作り直したりしていた。空襲時には、家の外に穴を掘ってできた大人には窮屈な大きさの防空壕へ逃げていた。防空壕に入った後、フタをして草木などで覆っていたという話が印象的だった。八代の地から、長崎の原爆投下時と思われる空に、きのこ雲をみたという。

3.2 大戦後の様子

茶道が一般市民の間で再始動したのは、昭和30年頃、終戦から10年ほど経過した後のことである。戦時中、特攻隊に入っていた大宗匠(千玄室氏)は生還し、茶道の復興に力を注いだ。この頃の日本では、茶道の各流派を寄せ集め、茶道が終戦後本格的に行えるようになった。当時のお茶菓子は、まだ材料が豊富に無く、唐芋饅頭だったという。一般市民が茶道を行えるようになり、日本がようやく戦後の混乱から抜け出せたことが伺える。その後、茶道同好会のような表千家、裏千家、肥後古流、煎茶の四流派が集った団体が作られ、茶道の発展が進められた。今日まで茶道を始めとする伝統文化の継承活動は続けられており、原田氏も学校茶道の指導員として30年間務めた経験がある。

3.3 茶道とは

原田氏にとって、茶道とは、お点前の中に自然や人、道具等のいろいろなものを通して相手(お客様)を大切にすること。そのようなことがお点前に凝縮されている。所作等の決まり事も大事だが、その中に人(お客様)を大切にすることを忘れてはいけない。季節ごとに道具を変えたり、掛け軸や花を変えたり、点前作法やお菓子、茶碗を変えることで、相手を喜ばせたり、楽しませたりすることにつながる。大切なのは、お金のかかった道具やものより、一碗のお茶、一つ一つに心を入れることである。

4. おわりに

戦国時代に、千利休が発展させたお茶の精神は、第二次世界大戦後の人々に訴えかけるメッセージがあるように思う。武士が茶室に入る際には刀を持ち込まないように、皆が平等に、ただひたすら互いのことを思う茶道が代々続いている。この精神は、茶道という形だけでなく、その精神までもが戦争でおざなりにされていた「相手を大切にすること」を改めて人々に気づかせたのではないかな。千利休の精神は、第十一代裏千家家元が書かれた掛け軸「和敬清寂」(和=平和と調和、敬=互いに敬いあう、清=清らかな気持ち、寂=何事にも動じない気持ち)^①にも表れている。第二次世界大戦の悲惨さを忘れずに繰り返さず、和敬清寂に、この世の中が平和であることを一心に願う。

謝辞

インタビューを快く引き受けてくださった原田宗柳氏に心より感謝する。

(平成30年9月25日受付)

(平成30年12月5日受理)

参考文献

- (1) 桑田忠親:「茶道史年表」, 東京堂出版, (1973).
- (2) 谷端昭夫:「日本史のなかの茶道」, 淡交社, (2010).
- (3) 千玄室:「茶のこころを世界へ(100年インタビュー)」, PHP 研究所, (2014).
- (4) 橋本五郎:「戦後70年につぼんの記憶」, 中央公論新社, pp.208-211 (2015).
- (5) 「「一碗から平和を」千玄室氏, 戦争体験語る 沖縄女子短期大学」, 琉球新報(電子版), (2018年4月11日).
- (6) 「パリで日仏友好献茶式 裏千家の前家元」, 共同通信(電子版), (2018年6月29日).
- (7) 「平和祈念し献茶 裏千家淡交会 600人が参列」, 長崎新聞(電子版), (2018年8月9日).